
真・恋姫†無双～永遠の軌跡～

十六夜 白爛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜永遠の軌跡〜

【Nコード】

N8386Y

【作者名】

十六夜 白爛

【あらすじ】

私は聖フランチェスカ学園の生徒。ある事件に巻き込まれ、私は死んだ。でも、目が覚めるところは……

プロローグ（前書き）

至って普通（？）のプロローグ……… 始まります。

プロローグ

「親父おかわり！」

「ハッハッハッ、たーんと食べよ。魁瑠」

ある日の朝、少し赤髪をした男が父親と思われる人と食事をしている。そして、ご飯をもりもりと食べている男が徐晃 公明 真名は魁瑠。

真名とは許される者が呼べる名前であり、それ以外の者が呼べば即討ち首もの。それほど凄い名前なのだ。

「それより親父、一緒に修行するんじゃないの？」

「ん？ そうだったか？」

「おいっ！ 誘ったのはアンタでしょ！」

そんなコントみたいな話をしていたら、1つの光がとある場所に落ちてきた。

「何だ、あれ……」

落ちた場所は幽州、後の蜀になる場所へ落ちたのだ。それをあまり気にしなかった徐晃は、淡々と父親と修行を積むのであった。

そしてその時間より少し前の同日、とある少女はハイジャックに会い殺された。そこで彼女はまた命を貰う代わりに異世界に行く、それを条件に転生した。

髪がショートで群青色の彼女の旧名は秋奈^{あきな} 月詠^{ツクヨ}、現在の名は高順

公台。呂布の武將の1人だ。

「天照さん、お風呂わきましたよ」

「ありがとう、月」

1人少女は満月を見て思うのであった。あなたはどこにいるの、と。そんな高順を後ろから心配そうに見つめる女性がいた。その名は董卓。真名は月、見るからに優しそうなオーラを出す少女は、後の反董卓連合で倒される人物。しかしそれは正史の話、ここにいる人物は女性にして三國志の有名な将、実力はかなりのものである。そんな不安そうな目をしている董卓に優しく「大丈夫」とささやく。

「どこにいるの、魁瑠……」

彼女の魁瑠とは徐晃である。高順曰く、徐晃と高順は幼なじみであり部活の先輩後輩。聖フランチエスカ学園に通う2人だが、ある日魁瑠は突然いなくなったのだ。

「考えても仕方ないわね」

パサッとその場で服を脱ぎ、風呂場へ移動する。

この時代の風呂はかなり珍しく、5日に風呂が入れるかどうかだ。そんな貴重なお風呂を一番乗りで入れるのはかなり幸運である。

「熱い」

「そうね、少し熱——！？」

先客がいたみたいだ。赤髪をした少女、名は呂布。真名は恋。あの

三國志最強と言われた呂布である。そしてもう1人いるのは名は華雄、真名は藍梨。正史では関羽が討ち取り、破れた人物である。

「おお、天照ではないか。どうなさった？」

「どうもこうもないわよ、私が一番乗りと思っ
てきてみれば恋と藍梨に先越されて……」

グチグチと喋り、恋と藍梨はのぼせている。それを後から来た月に助けてもらったのはまた別のお話。

プロローグ（後書き）

はい。という事で新しく書いてみました。
さて、この小説がどんな行き先になるのかは次回を御参照下さいませ。

キャラ説明（前書き）

魁瑠と月詠の簡単なプロフィールです。

キャラ説明

旧名：赤星あかほし 魁瑠カイル

姓：徐

名：晃

字：公明

真名：魁瑠

性格：かなりお転婆で、軍議に遅刻すること多々ある。関羽のことを理想像と考え、いつか乗り越える目標としている。

武器：旋刃盤（火炎斬魔盤）

備考：前世の記憶はない。あるのは誰かと約束をしたこと。しかし、彼にとってはもうちっぽけな話。

旧名：秋奈あきな 月詠ツクヨ

姓：高

名：順

字：公台

真名：天照

性格：冷静

武器：双剣（白天・黒燐）

備考：魁瑠の幼なじみで、なんとなく華雄のストッパーの位置。怒るとその殺気で空気どころか恋すら震え出す。
もし魁瑠と再会したら「とりあえずはっ倒す」つもりらしい。

キャラ説明（後書き）

次回はいきなりですが、黄巾の乱に移ります。

では、次回までさよならです。

黄巾の乱ゝ序章ゝ（前書き）

今回は黄巾の乱の序章です。

どうぞ、見てってください！！！

黄巾の乱 序章

「なあ魁瑠、お前…旅してみないか？」

朝、徐晃の父が意外な発言をした。

旅に出てみる、それはどこかの国に移住すると同じであり、そして今の時代は旅に出ることは危険が伴う。

それを承知した上での旅とは生きるか死ぬか、つまり乱世を生き抜くには戦わなければならない。

「んでさ、親父は何で俺に旅をしろとか言うんだ？」

「……世の中には俺らより強いヤツがわんさかいる、わかるな？」

「親父……」

スタスタと父親の前に来て、肩をポンポンと叩く。

「分かるかあああつ！！！！」

おもいつきり父親の脳天に踵落としを炸裂させる。

父親はゴロゴロと転がって頭を押さえながら『キッ』と魁瑠を睨み付ける。

「父親に向かって踵落としは無いだろ！！」

「うるせえええ！！！！ それだけじゃ分かるわけないだろ！！！！」

「お前は父さんに似ている、だから分かる！！」

「もはや言葉が意味不明だ！！」

そんな漫才のような話をしていると、父親が少し真面目な顔をして重い空気になる。

「魁瑠よ、俺は結婚する前は旅人だったと知っているな？」

「あ、ああ……」

「旅とは幾つもの試練を乗り越える、しかしそれを乗り越えれば父さんが言っていたことがわかるはずだ」

魁瑠は数秒間考え、徐一族に伝わる代々の宝具、旋刃盤 『火炎斬魔盤』を取り出す。

その行為に仰天する父だが、旋刃盤を持つとはどんな意味なのかすぐにわかり、『フウ……』とため息をつく。

「行ってこい、徐一族をなめられないようにな」

「ああ、わかった」

場所は変わって洛陽。高順こと天照は自分の武器、双剣『白天・黒燐』を見てため息をつく。

そこへ紫の髪をして胸元にサラシを巻いた女性が来る。

その者の姓は張、名は遼、字は文遠、真名は霞。
後の魏の武将となる人だ。

「霞、何の用かしら？」

「何の用とは失礼やな、ウチは自分を心配してここまで来たんやで？」

「はいはい。で、何の用なの？」

張遼は「洛陽の近くに黄巾賊が攻めてきている」と言う。そして高順は『黄巾賊』と言う単語に心が引つ掛かった。

『黄巾賊』とは、誰もが知る黄巾の乱で黄色い布を身につけている盗賊達の総称。

その黄巾賊の主導者と言われているのは張角、張宝、張梁と呼ばれる3人である。

「黄巾賊がここまで攻めてきた……血が騒ぐわね」

高順の一言で一瞬大気が震える。そんな感じがした。

白天・黒燐を持ち、張遼の言う黄巾賊が攻めてくる場所まで馬で移

動する。

「ち、ちよつ、待ちいや！ 天照だけで行くのは危険や！ ウチも行く」

「霞は後から藍梨と来るように、お願い」

お願い、そのセリフに弱い張遼は、「死んだらアカンで」と言つて華雄を呼びにいく。

「……私は死なないわ、月を守りきるまでは……！！」

ふと空を見上げると……今宵は満月、その満月の光を赤く染め上げよう、そう考えながら馬を走らせる。

その頃魁瑠は、黄巾賊と戦っていた。

「せやあああつ！！！！！！」

「ぐふっ！？」

「な、何だコイツは！？」

「俺は徐 公明、お前ら黄巾賊をブツ潰す男だ！！！！」

「てやあああああつ！！！！」

旋刃盤を投げ付けて絡ませ、相手が怯えたところで一気に引く。相手は物言わぬ肉塊になった。

「さあ、次はどいつだ!!」

「ええい、1人相手に何してるんだ！ 押せえええつ!!!!!!!!!!」

「無理だよ、お前らじゃな」

黄巾賊の一人が後ろを見るとそこには徐晃がいた。

徐晃は『ニコッ』と笑い、火炎斬魔盤を投げ付け、旋刃盤の刃を相手に刻み付ける。

「はあっ!!」

「ぐあああっ!!!!!!!!!! あ、熱いいいつ!!!!!!!!!!?」

斬られた場所から熱が発生し、悶え苦しむ黄巾賊。

徐晃は次々と敵を斬り裂き、敵はとうとう最後の1人となった。

「これで――」

魁瑠は火炎斬魔盤を上にあげ、勢いよく振り下ろした。

「終わりだああああっ!!!!!!!!!!」

魁瑠が斬り終わると、突如として雨が降り出す。

それは何かの始まりを告げるように、何かを示すかのように。

「親父、俺はこの乱世で生き抜くことが出来るのかな……？」

1人しんみりと雨に慕っていると、向こうから1人の黒髪の女性が現れる。

黄巾をしていない、殺意も敵意もない。けれど、一応警戒をする魁瑠。

気を抜けばなまなくばやられる。そんな事を考えていると、黒髪の女性が声を掛けてくる。

「ん？ 貴様、ここで何をしているのだ？」

「……ただの通りすがりです」

「これは貴様がやったのか？」

「はい、民が襲われていたので我慢が出来ず滅しました」

「うむ……」と黒髪の女性が頷く。

すると、次は水色の髪をした女性と金髪の少女が馬に乗りながら徐晃のところに来る。

「これは……華琳様！」

「ええ、この力は……」

華琳と呼ばれた少女は『スッ……』と徐晃を見て、「ふむふむ……」と1人で納得する。
わけがわからない徐晃は恐る恐る聞く。

「えと、何か……？」

「これ、あなたが全部やったの？」

「あ、はい。民が襲われていたので、1人で黄巾賊を殲滅しました。……何か不味かったでしょうか……？」

「……」

華琳は無言でジロジロと魁瑠を見る。

彼女は何か覇気のようなものを纏っている。

しかし、その覇気がなくなるように『ニヤリ』と笑う。

「ねえ、貴方私のところで働かない？ あなたの武、見てみたいわ」

「え、あ……しかし、名も知らぬ者に付くのは……」

「あ、名乗り遅れたわね。私の姓は曹、名は操。字は孟徳よ」

「！！！！？…し、失礼いたしました！！ 姿を知らぬ故、誠に失礼な発言を致しましたことをお詫び申し上げます！！」

彼女は曹操、知る人ぞ知る魏の霸王。

黒髪の女性は夏侯惇、字は元讓。魏の将で、曹操の右腕。

水色の髪の女性は夏侯淵、字は妙才。夏侯惇の従姉妹であり、弓術が優れている。

この3人は、三國志の魏では中心となっている人物である。

「謝るのはいいわ、…それより先ほどの答えが聞きたいのだけれど？」

「はっ！！…私、徐公明は曹操様に仕える事をここに誓います。放浪の身となっていた私を救って頂いたことを感謝いたします」

徐晃は感じていた。

曹操がこの先素晴らしい世界を見せてくれるのだらうと。そしてこの先も。

…一方、高順は黄巾賊の殲滅に急いでいる。

「遅くなつてすまない！」

「よっしゃ！ ウチが来たからには容赦せえへんぞ！」

華雄と張遼が着き、3人で殲滅に取り掛かる。

「……はあっ！！！」

高順は白天・黒燐で相手を斬り刻み、腹に風穴を開ける。すると後ろから矢が飛んでくる。

しかし高順は動かない。

後ろに華雄がいるから、最も信頼を寄せているから必ず守ってくれるだろうと信じていたから。

「たあっ！！」

高順の予想通りに華雄は後ろから登場して矢を弾く。

「よっ…しゃ！！」

思わず口にだし、ガッツポーズを取る。

「流石は藍梨ね、私も本気を出そうかしら？」

「今までホンキじゃなかったちゅうことが、怖い怖い」

それぞれが奮闘して黄巾賊を殲滅。3人のお陰でこの地は守られたのであった。

黄巾の乱〜序章〜（後書き）

序章なので、とりあえず黄巾の乱編は続きます。

どこか誤字や言葉の用法が違ってたりしてましたら教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8386y/>

真・恋姫†無双～永遠の軌跡～

2011年12月3日21時02分発行